BEA WebLogic Integration™

リリース ノート

リリース 7.0 Service Pack 5
マニュアルの日付 : 2004 年 4 月

著作権

Copyright © 2004, BEA Systems, Inc. All Rights Reserved.

限定的権利条項

本ソフトウェアおよびマニュアルは、BEA Systems, Inc. 又は日本ビー・イー・エー・システムズ株式会社 (以下、「BEA」 といいます) の使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができ、同契約の条項通りにのみ使用またはコピーすることができます。同契約で明示的に許可されている以外の方法で同ソフトウェアをコピーすることは法律に違反します。このマニュアルの一部または全部を、BEA Systems, Inc. からの書面による事前の同意なしに、複写、複製、翻訳、あるいはいかなる電子媒体または機械可読形式への変換も行うことはできません。

米国政府による使用、複製もしくは開示は、BEA の使用許諾契約、および FAR 52.227-19 の「Commercial Computer Software-Restricted Rights」条項のサブパラグラフ (c)(1)、DFARS 252.227-7013 の「Rights in Technical Data and Computer Software」条項のサブパラグラフ (c)(1)(ii) 、NASA FAR 補遺 16-52.227-86 の「Commercial Computer Software--Licensing」条項のサブパラグラフ (d)、もしくはそれらと同等の条項で定める制限の対象となります。

このマニュアルに記載されている内容は予告なく変更されることがあり、また BEA による責務を意味するものではありません。本ソフトウェアおよびマニュアルは「現状のまま」提供され、商品性や特定用途への適合性を始めとする (ただし、これらには限定されない) いかなる種類の保証も与えません。さらに、BEA は、正当性、正確さ、信頼性などについて、本ソフトウェアまたはマニュアルの使用もしくは使用結果に関していかなる確約、保証、あるいは表明も行いません。

商標または登録商標

BEA、Jolt、Tuxedo、および WebLogic は BEA Systems, Inc. の登録商標です。BEA Builder、BEA Campaign Manager for WebLogic、BEA eLink、BEA Manager、BEA Liquid Data fro WebLogic、BEA Manager、BEA WebLogic Commerce Server、BEA WebLogic Enterprise、BEA WebLogic Enterprise Platform、BEA WebLogic Express、BEA WebLogic Integration、BEA WebLogic Personalization Server、BEA WebLogic Platform、BEA WebLogic Portal、BEA WebLogic Server、BEA WebLogic Workshop および How Business Becomes E-Business は、BEA Systems, Inc の商標です。

その他の商標はすべて、関係各社が著作権を有します。

WebLogic Integration リリース ノート

パート番号	日付	ソフトウェアのバージョン
なし	2004 年 4 月	7.0 Service Pack 5

目次

このリリースの BEA WebLogic Integration について 2
このリリースの新機能と改良点 3
プラットフォーム サポートおよびシステム要件 4
関連ソフトウェア 4
BEA WebLogic Integration - Business Connect 7.0 4
BEA EDI Connect for WebLogic Integration 5
BEA WebLogic Adapter 5
ベスト プラクティス 5
NewSize JVM オプションとパフォーマンス 6
BEA_HOME 環境変数の推奨される長さ 6
NULL 変数のサポート 6
アドレス指定メッセージング 7
ネストされたワークフロー 7
SendXMLToClient を使用したプログラムの呼び出し 7
UNIX 環境における BPM プラグイン 8
データベースの初期化 8
非推奨の機能 8
今回のリリースで修正された問題 10
確認済みの制限 17
変更要求 17
クラスタでの Oracle データベースと WebLogic Integration の使用 26
Studio ワークフロー ウィンドウの点滅 27
DB2 オプションは Domain Wizard では提供されない 27
BPM コマンドライン ユーティリティがハングしたように見える 28
ドキュメントの追加、変更、および訂正 28
閉じた環境にアプリケーション ビューをデプロイする際に発生する問題の回避策 28

WebLogic Server セキュリティ ドキュメントのリンクの変更 29
BPM プラグイン サンプルの説明に対する訂正 30
Data Integration プラグイン サンプル アプリケーションの実行に関する訂正 30
テンプレート定義の互換性 32
「B2B Console へのインポート」への更新 33
「カスタム例外ハンドラの使い方」への追加 34
configDomain ドキュメントの場所 34
テンプレート定義情報に関する訂正 34
プラグインのデプロイ手順に関する補足 35
「weblogic.Admin コマンドライン ユーティリティを使用する方法」に対する変更 36
「Web サーバおよび WebLogic プロキシ プラグインでの WebLogic Integration のコンフィグレーション」に関する訂正 37
「クラスタ対応リソース」に対する変更 37
「メール セッションの設定」への追加 38
「リポジトリに XML エンティティをインポートする」への追加 38
「バイナリから XML への変換」に関する変更 38
「システム パスワードの更新」に関する補足 39
「ビジネス カレンダーの管理」への追加 39
インストール 40
完全インストール 40
アップグレード インストール 40
RDBMS アダプタ 41
移行 41
コンフィグレーション ウィザードを使用して作成したドメインの移行 41
WebLogic Integration 7.0 SP2 以前のバージョンからの移行 42
wlicommon.jar から削除された XT 実行時クラス 42
RosettaNet スキーマの変更点 43
WebLogic Integration での Oracle XA の使用 43
XA に変更が必要 43
考慮事項と制限事項 50
XA 回復処理の設定 51

WebLogic Integration リリース ノート

BEA WebLogic Integration リリース 7.0 Service Pack 5
日付 : 2004 年 4 月

このマニュアルの内容は以下のとおりです。

- このリリースの BEA WebLogic Integration について
- このリリースの新機能と改良点
- プラットフォーム サポートおよびシステム要件
- 関連ソフトウェア
- ベスト プラクティス
- 非推奨の機能
- 今回のリリースで修正された問題
- 確認済みの制限
- インストール
- 移行
- WebLogic Integration での Oracle XA の使用

リリース ノートの更新情報については、次の URL にある BEA 製品マニュアルの Web サイトを参照してください。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/index.html`

このリリースの BEA WebLogic Integration について

WebLogic Integration 7.0 Service Pack 5 (SP5) は、WebLogic Integration の新しいサービス パックのリリースです。WebLogic Platform 7.0 SP5 には製品全体の重要な変更が含まれますが、WebLogic Integration の重要な変更は含まれません。すでにプロダクション環境の WebLogic Integration 7.0 Service Pack 2 または WebLogic Integration 7.0 Service Pack 4 でアプリケーションを使用している場合は、WebLogic Integration 製品のみを考慮すると必ずしも SP5 にアップグレードする必要はありません。WebLogic Integration 7.0 SP5 は、WebLogic Server 7.0 SP5 のメンテナンスを適用したい場合など、特別な理由がある場合には必要となります。WebLogic Integration 7.0 SP5 にアップグレードする場合は、他のサービス パックによるアップグレードの場合と同様、ユーザ自身が新しいサービス パックでアプリケーションを十分テストしてからアップグレードを行うことをお勧めします。

WebLogic Integration 7.0 SP5 は、企業内のビジネス システムを統合し、これらのシステムを協調的な協定 (コラボレーション アグリーメント) の下でトレーディング パートナにリンクするための機能を提供します。

この機能の基盤となるのは、業界をリードする J2EE アプリケーション サーバの BEA WebLogic Server です。WebLogic Server は、トランザクション管理、セキュリティ、フォールト トレランス、永続性、クラスタリングをサポートする統合ソリューションの開発に不可欠なインフラストラクチャを提供します。

WebLogic Integration 7.0 SP5 は、以下の機能を提供することでエンド ツー エンドのビジネス統合をサポートします。

- *Business Process Management*。既存のエンタープライズ システム、クロスエンタープライズ アプリケーション、および意思決定者を統合する複雑な E ビジネス プロセスの開発を可能にします。
- *Application Integration*。既存のエンタープライズ アプリケーション同士の統合および新しい E ビジネス アプリケーションとの統合を可能にします。
- *B2B Integration*。インターネット上のトレーディング パートナの連結、および EDI 環境と WebLogic Integration の統合を可能にします。

- *Data Integration*。アプリケーション間およびインターネット上のトレーディング パートナ間でさまざまなデータ フォーマットのスムーズな交換を可能にします。

このリリースの新機能と改良点

BEA WebLogic Integration 7.0 SP5 では、確認済みの問題を修正するプログラムを配布します。このリリースには、新しい機能や拡張などは含まれていません。

WebLogic Integration 7.0 SP5 には、電子メール プラグイン、HTTP プラグイン、および xFILE プラグインがあらかじめデプロイされています。これらのプラグインは、以前は別途入手して WebLogic Integration で使用することができました。WebLogic Integration のサンプル ドメインと、コンフィグレーション ウィザードを使用して作成したすべての WebLogic Integration ドメインには、これらのプラグインがあらかじめデプロイされます。各プラグインで修正された問題については、そのプラグインのリリース ノートを参照してください。

電子メール プラグインの詳細については、次の URL にある『Email plugin release notes』を参照してください。

`http://edocs.bea.com/wlplugins/email/docs71/pdf/relnotes.pdf`

HTTP プラグインの詳細については、次の URL にある『HTTP plugin release notes』を参照してください。

`http://edocs.bea.com/wlplugins/http/docs71/pdf/relnotes.pdf`

xFile プラグインの詳細については、次の URL にある『xFile plugin release notes』を参照してください。

`http://edocs.bea.com/wlplugins/xfile/docs71/pdf/relnotes.pdf`

また、WebLogic Integration 7.0 SP5 には RDBMS アダプタが付属しており、WebLogic Integration 7.0 SP5 のインストール時に RDBMS アダプタが自動的にインストールされます。

プラットフォーム サポートおよびシステム要件

ハードウェアおよびソフトウェア要件などの、プラットフォーム サポートについては、以下のサイトの「サポート対象プラットフォーム」ページを参照してください。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html`

WebLogic Platform の詳細および WebLogic Integration のインストールとコンフィグレーションに関する最新情報については、以下の URL にある『WebLogic Platform 7.0 リリース ノート』を参照してください。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/relnotes/index.html`

関連ソフトウェア

以下の節では、WebLogic Integration と併用して使用できるソフトウェアについて説明します。

BEA WebLogic Integration - Business Connect 7.0

WebLogic Integration - Business Connect を使用すると、トレーディング パートナと大量のドキュメントを安全に交換できるようになります。WebLogic Integration - Business Connect では、ドキュメントを、スケジュールに従ってトレーディング パートナ間に送信されるセキュア エンベロープにパッケージ化します。

このコンポーネントの詳細については、URL (`http://edocs.bea.com/wlibc/docs70/index.html`) を参照してください。

BEA EDI Connect for WebLogic Integration

EDI Connect for WebLogic Integration を使用すると、EDI から XML へのドキュメント マップを定義できます。また、トレーディング パートナとの関係の管理、および EDI メッセージの送受信をすることができます。

EDI Connect for WebLogic Integration は、WebLogic Integration を購入された場合は別途アドオンの形で入手できます。EDI Connect for WebLogic Integration は Power.Enterprise! として提供され、クライアントおよびサーバの両方のコンポーネントを含みます。このアドオンは、評価版として「BEA Download Center」からダウンロードできます。URL は次のとおりです。

`http://commerce.bea.com/showallversions.jsp?family=WLI`

詳細については、EDI Connect for WebLogic Integration ソフトウェアに付属のマニュアルを参照してください。

BEA WebLogic Adapter

このリリースの時点で、バージョン 7.x の BEA WebLogic Adapter はすべて、WebLogic Integration 7.0 SP5 での使用に関して認定済みです。

ベスト プラクティス

この節では、WebLogic Integration コンポーネントおよび機能に関するベスト プラクティス、および使用法に関する情報を記載します。

- NewSize JVM オプションとパフォーマンス
- BEA_HOME 環境変数の推奨される長さ
- NULL 変数のサポート
- アドレス指定メッセージング
- ネストされたワークフロー

- SendXMLToClient を使用したプログラムの呼び出し
- UNIX 環境における BPM プラグイン
- データベースの初期化

NewSize JVM オプションとパフォーマンス

`-XX:NewSize` JVM オプションを使用すると、一部のパフォーマンス ベンチマークが改善します。詳細については、『WebLogic Integration ソリューションのデプロイメント』の「パフォーマンスのチューニング」を参照してください。

BEA_HOME 環境変数の推奨される長さ

`BEA_HOME` 環境変数の定義を 10 ～ 12 文字の範囲に制限する必要があります。

NULL 変数のサポート

WebLogic Integration 7.0 は、`startWebLogic` スクリプトの `wli.bpm.server.evaluator.supportsNull` オプションを通じて変数の NULL 値をサポートします。

このオプションを `true` に設定すると、すべての変数が NULL 値に初期化されます。このオプションを `false` に設定すると、すべての変数がデフォルト値に初期化されます。このオプションのデフォルト設定は `false` です。

このオプションの詳細については、『WebLogic Integration の起動、停止およびカスタマイズ』を参照してください。

アドレス指定メッセージング

アドレス指定メッセージングは、メッセージ配信を保証したい場合に使用します。このオプションの詳細については、『WebLogic Integration Studio ユーザーズガイド』の「アクションの定義」にある「アドレス指定メッセージング」を参照してください。

ネストされたワークフロー

ネストされたワークフローは、トランザクション タイムアウトになる場合があるので、スケーラビリティ分析を行う必要があります。親がトランザクション タイムアウトになると、子もすべてタイムアウトになります。

SendXMLToClient を使用したプログラムの呼び出し

`cmd.exe` などのシェル プログラムへのアクセスを有効化すると、`SecurityManager` の機能が無効になり、有害ワークフローがクライアント コンピュータにアクセスして障害を発生させる恐れがあるため、注意が必要です。セキュリティを悪化させないためには、ワークフロー実行に必要なプログラムだけを厳選するようにしてください。

`WLPISec.properties` には、次に挙げるような不適格な実行ファイルのリスト (1 行につき 1 項目) が入っています。

- `cmd.exe`
- `winword.exe`
- `mm.exe`

UNIX 環境における BPM プラグイン

プラグイン アーキテクチャでは、AWT ライブラリのイメージ オブジェクトを使用します。したがって、このオブジェクトを作成するため、サーバに DISPLAY 環境変数を設定する必要があります。このプラグインは、イメージ ファイルを電信で送り、クライアントがイメージ オブジェクトを作成できるようにします。

UNIX システムが使用される場合は、問題が生じます。プラグインによって、Xwindow サーバに接続されるため、ログオフを行うと、WebLogic Server までダウンすることがあります。これは WebLogic Server を nohup で起動し、バックグラウンド モードで稼働している場合でも同様です。したがって、Xwindow サーバを必要とするクラスをプラグインでインスタンス化することは避けてください。

データベースの初期化

B2B Console で [インポート] タブにある [コンフィグレーション] の [データベースの初期化] オプションを yes に設定すると、その後リポジトリ データをインポートする際に、既存のデータが破棄されます。[データベースの初期化] パラメータを yes に設定する場合は、注意が必要です。この問題は、CR077846 で追跡されています。

非推奨の機能

非推奨の機能は、将来のリリースで製品から完全に削除されます。以下の項目は WebLogic Integration 7.0 から非推奨になりました。

- B2B XOCP プロトコル
- B2B XOCP BPM プラグイン
- B2B cXML プロトコル
- B2B ロジック プラグイン
- B2B Messaging API

- B2B トレーディング パートナの zeroweight クライアント
- Swing ベース BPM Worklist クライアント

以下の表は、非推奨の機能の代替機能をまとめたものです。

非推奨の機能	代替機能
XOCP プロトコル	ebXML または RosettaNet
XOCP BPM プラグイン	
cXML プロトコル	
B2B ロジック プラグイン	同等の機能はありません。
Messaging API	ebXML JMS インタフェースまたは BPM ワークフロー
トレーディング パートナの zeroweight クライアント	Portlet および HTML ベースの Zeroweight トレーディング パートナ クライアントを使用する JSP タグ ライブラリが、今後のリリースで提供される予定です。
Swing ベース BPM Worklist クライアント	JSP ベース Worklist クライアントが WebLogic Integration SP5 リリースで提供されています。 **注意：** 非推奨になるのは、現行では Java Swing ユーザ インタフェースのみです。Worklist API は、非推奨になっていません。

さらに、いくつかのサンプルが、非推奨の機能 (XOCP プロトコルなど) を使用しています。これに該当する以下のサンプルは、WebLogic Integration 7.0 のリリースをもって非推奨になりました。

- B2B Mailboxes (サンプル)
- B2B File Synchronization Client (サンプル)
- B2B Browser クライアント タグ ライブラリ (サンプル)

WebLogic Integration 7.0 SP4 では、以下の非推奨サンプルがサンプル起動ページから削除されました。

- Hello Partner
- Channel Master
- Messaging API
- Trading Partner Zeroweight Client

今回のリリースで修正された問題

以下の表は、BEA WebLogic Integration 7.0 SP5 で修正された問題の抜粋を、問題の CR (変更要求) 番号と共に一覧にしたものです。BEA WebLogic Integration 7.0 SP5 で修正された問題の全リストが必要な場合は、BEA カスタマ サポートにお問い合わせください。

表 **1. BEA WebLogic Integration 7.0 SP5** で修正された問題

変更要求番号	説明
CR081139	テンプレートのインポート、アクティブ化、および非アクティブ化のための API が下位ワークフロー参照を解決しない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR090584	NullPointerException によるクラスタ起動後、リモートの管理対象サーバ上にサンプル DBMS アダプタ用の新しいアプリケーション ビューを作成できない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR093787	`wlpi-mdb-ejb.jar` の `ejb-jar.xml` デプロイメント記述子で、メソッド パーミッションおよびコンテナ トランザクションの下に TimeListener-0 から TimeListener-4 のエントリがない。この問題の修正では、これらのエントリがデプロイメント記述子に組み込まれる。
CR096232	リモートの管理対象サーバからアプリケーション ビューを作成する場合、JEvent Router の URL が誤ったサーバを指す。この問題は、このリリースで修正済み。

変更要求番号	説明
CR098538	JSP Worklist の [Send XML to Client Message] ボックスが正しく機能しない。ボックスのタイトルは表示されるが、ボタンがない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR102326	管理サーバから管理対象サーバにユーザとグループが取得されない。この問題により、クラスタ化されたサーバでは WebLogic Workshop Studio で作成したユーザが失われる。この問題は、このリリースで修正済み。
CR102943	Business Process Management SF セッション Bean は `remove-during-transaction` フラグを使用しない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR103297	WebLogic Integration によって送信されたメッセージに対して XML メッセージ セレクタを使用できない。この問題の修正では、`jms/XMLMessageType` という新しいブール型環境変数を追加し、BPM NotifierBean から `String` ペイロードによってメッセージを送信する場合に、TextMessage を使用するか、または XMLMessage を使用するかを指定する。この変数を `true` に設定すると、BPM から送信されたメッセージのタイプは `weblogic.jms.extensions.XMLMessage` となり、`false` に設定すると、メッセージのタイプは `javax.jms.TextMessage` になります。デフォルト値は `false` です。
CR106009	BPM Command Line Administration Tool を使用してワークフローのインスタンスを削除しようとすると、そのワークフローのインスタンスが完了していない場合は NULL ポインタ例外でエラーになる。この問題は、このリリースで修正済み。
CR106050	FTP サービスのユーザ / パスワードで変数を使用できるようにする拡張要求があった。この問題の修正では、変数を使用するかどうかを指定するチェック ボックスが組み込まれる。チェック ボックスをオンにすると、ユーザ名とパスワード のテキスト ボックスの横に式のボックスが表示される。チェック ボックスをオフにすると、テキスト ボックスのみが表示される。

変更要求番号	説明
CR106463	メッセージがトランザクションの外部でデキューされた場合、EventListenerBean はメッセージをキューに転送しない。この問題の修正では、JMS サブシステム以外によって開始されたセッションで処理されたメッセージの転送先キューをユーザが指定できるように、イベント処理を変更する。メッセージの転送先となるキューの JNDI 名は、`ejb-jar.xml` デプロイメント記述子に、`wlpi-mdb-ejb.jar` ファイルにある EJB 環境変数 `jms/errorQueue` で指定される。イベント リスナ MDB のデフォルト設定は `com.bea.wli.FailedEventQueue`。
CR106463	`getTasks()` から返されるタスクの一覧に古い情報が示されることがある。この問題は、このリリースで修正済み。
CR107782	bpmadmin ユーティリティのインポート / エクスポート機能を、WebLogic Studio のインポート / エクスポート機能と似た動作にするように拡張要求があった。この問題は、このリリースで修正済み。
CR107861	`Worklist.response()` を使用して `data` 型のオブジェクトをサーバに送信した場合、サーバはエラーを返す。この問題は、このリリースで修正済み。
CR108352	WebLogic Integration Server Console でデバッグを無効にしても、標準出力にデバッグ情報が出力される。この問題は、このリリースで修正済み。

CR110566	テンプレート定義の実行中インスタンスがあるときにそのテンプレート定義が非アクティブ化された場合、情報メッセージを出力するように拡張要求があった。この問題の修正では、com.bea.wlpi.server.admin.Admin に以下のメソッドを追加する。
	`public List getChildInstanceInfo(String instanceID)`
	`throws RemoteException, WorkflowException)`

CR110624	Admin API を使用してテンプレート定義をアクティブ化できない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR112358	基本日付を使用した `DateAdd()` 関数が、ビジネス カレンダーに従わない。この問題は、このリリースで修正済み。

変更要求番号	説明
CR112496	ファイル起動イベント時に、ファイルの内容だけでなくファイル名を読めるようにするための拡張要求があった。この問題の修正では、ファイル名を読めるようにするかどうかを指示するチェック ボックスと、ファイル名を選択するためのドロップダウン ボックスが組み込まれる。チェック ボックスをオンにするとユーザはファイル名を読むことができる。この場合、ファイル名を保持する文字列をドロップダウン ボックスで選択する必要がある。
CR112511	WebLogic Integration データと依存インスタンスを自動アーカイブできない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR112680	カスタム例外ハンドラで例外が発生した場合に正しくない例外処理が検出された。この問題の修正では、ワークフローを終了するシステム例外ハンドラを呼び出す。
CR112905	bpmadmin ツールを使用してワークフロー インスタンスをアーカイブした場合、例外が送出される。この問題の修正では、有効なワークフロー インスタンスを使用してアーカイブを続行し、失敗したインスタンスをスキップできるようにする。
CR112961	Solaris 上での bpadmin ツールを使用したインポートまたはエクスポートの後、時限イベントが正しくないビジネス カレンダーに関連付けられることがある。この問題の修正では、日付の解析を修正した。
CR112967	有効期限の日付を指定したテンプレート定義と有効期限の日付がない TemplateDefinitionInfo オブジェクトを比較したときに、例外が送出される。この問題は、このリリースで修正済み。
CR112998	RNIF2.0 署名付きメッセージのデコードでエラーが発生する。この問題は、このリリースで修正済み。
CR113084	Format Builder の C 構造体インポートで、[OK] ボタンをクリック後にダイアログ ウィンドウが閉じない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR113097	異なるイベント条件を持つ複数のリスナが存在する場合、アドレス指定メッセージが失われる。この問題は、このリリースで修正済み。
CR113412	bpmadmin ツールでルート要素が null のイベント ノードを含むテンプレート定義を解析すると、例外が送出される。この問題は、このリリースで修正済み。

変更要求番号	説明
CR113413	BPMadmin ツールで、インポート時にテンプレート定義の有効期限の日付が使用されない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR117176	BPMInit EJB によって実行されるいずれかの初期化タスクが失敗すると、以降のステップがスキップされる。この問題の修正では、`bpm-inti-ejb.jar` の `ejb-jar.xml` デプロイメント記述子にフラグを追加し、BPMInit EJB によって実行されるいずれかの初期化タスクが失敗した場合はサーバが起動しないようにした。このフラグは EJB 環境変数 `init/FailureIsFatal` で設定する。このフラグのデフォルト値は `false` で、サーバはライセンス チェック エラーの場合を除いて、1 つ以上の初期化タスクが失敗しても起動する。この値を `true` に設定すると、初期化エラーが発生した場合にはサーバは起動できない。
CR120058	WebLogic Integration Studio と BPMadmin ツールのいずれも、テンプレート定義アクティブ化プロセスでビジネス カレンダーへの参照を検証しない。これにより、ワークフローを実行したときに無効な参照エラーが発生する。この問題は、このリリースで修正済み。
CR120731	AI プラグインにエンコーディング リストがない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR121357	ビジネス プロセス管理ワークフローを使用するプロダクション環境で、負荷がかかった状態で 2 ～ 3 日実行後に実行速度が大幅に低下する。この問題は、このリリースで修正済み。
CR122132	WebLogic Integration Studio を使用して、開始ノードのプロパティの [アクション] タブで [ビジネス オペレーションを実行] アクションを更新すると、例外が送出される。この問題は、このリリースで修正済み。
CR122971	深くネストされたワークフローで StringIndexOutOfBoundsException が送出される場合がある。この問題の修正では、文字列処理ロジックを修正した。
CR123066	RosettaNet メッセージの否認防止署名付きメッセージ受け取りが署名されていない。これは RosettaNet RNIF 2.0 仕様のセクション 1.2.8.3 にある、PIP 仕様で明示的に規定された否認防止の要件に反する。この問題は、このリリースで修正済み。

変更要求番号	説明
CR124653	WebLogic Application Integration で _ServletContextidnameBEARDBMSEventRouterwarcontextpathBEARDBMSEventRouter_EventRouter.xml ファイルに誤った値が書き込まれる。この問題の修正では、このファイルに正しい値を書き込む。
CR124675	時限イベントを再アクティブ化または編集したときに、時限イベントが正常に実行されない。この問題の修正では、時限ロジックを修正した。
CR124736	WebLogic Integration Studio で、ネストされたグループをユーザにマップできない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR124800	コピーした「XML イベントをポスト」アクションをテンプレート定義に保存すると、メッセージ ヘッダ プロパティが保持されない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR125627	US-ASCII 文字セットを使用している COBOL Copybook をインポートしたときに、Format Builder でバイトが適切にマップされない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR125628	Format Builder に YYMMDD の日付書式をサポートする機能を追加するように拡張要求があった。この問題は、このリリースで修正済み。
CR125669	負荷がかかった状況のときに SOMSchema 検証が失敗する。この問題の修正では、フォーマッタの同期を取り、数値ファセットが適切に設定および取得されるようにした。
CR125760	ビジネス オペレーションの管理、使用、エクスポート、インポートで、ビジネス オペレーションがアルファベット順に表示されない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR126204	WebLogic Integration の初期化が完了する前に、WebLogic Integration にメッセージが配信される。この問題の修正では、`weblogic-application.xml` にフラグ `start-mdbs-with-application=false` を設定する。
CR126553	アプリケーション ビューのデプロイメント時に SecurityException (無効なサブジェクト) が送出される。この問題の修正では、初期化の前に、格納されているサブジェクトの有効性をチェックするようにした。

変更要求番号	説明
CR126902	ネストされた例外の処理中に問題が発生する。この問題の修正では、ResourceException (実際の例外をラップしている) をラップして、ネストされた例外にアクセスできるようにした。
CR127163	B2B は、SSL トンネリングを使用した発信プロキシをサポートしていない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR127400	WLI B2B は XA で `setAutoCommit` を呼び出す。この問題は、このリリースで修正済み。
CR127865	「終了して再試行」が設定されている場合に、エラーが発生したノードの再試行が行われない。この問題の修正では、終了例外ハンドラと再試行ロジックを修正した。
CR128034	サード パーティの XML パーサを使用したときに ClassCastException が送出される。この問題は、このリリースで修正済み。
CR128479	アドレス指定メッセージによってワークフローがパラレルではなくシリアルな順序で開始する。この問題の修正では、メッセージがテンプレートによってアドレス指定されている場合のデータベース ロックの処理と選択ロジックを修正した。
CR128825	WLI 2.1 で生成された xpath が WLI 7.0 と非互換。この問題の修正では、-fixupXPath オプションによって BPMadmin ツールを拡張した。
CR128915	BPMadmin ツールで、組織 ID が指定されていない場合にエクスポートが失敗する。この問題の修正では、エクスポート機能に対して未定義の組織 ID が指定された場合、情報を示す例外を送出してエクスポート処理を中止するようにした。
CR129455	完了したワークフローにアドレス指定メッセージを配信すると、例外が送出される。この問題は、このリリースで修正済み。
CR132196	サーバを再起動するときに一部のアプリケーション ビューが自動デプロイできない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR132472	WebLogic Studio で新しいユーザを作成する際に問題がある。この問題の修正では、管理対象サーバが管理サーバからユーザを取得する方法を修正した。

変更要求番号	説明
CR133386	RDBMS Adapter 7.0 使用時に JCA 接続の問題が断続的に発生する。この問題の修正では、リソース例外ハンドラのロジックを修正した。
CR133798	[Reschedule] をオンにして、開始済みの時限ノードを使用する場合、ワークフローの動作を予期できない。この問題の修正では、時限ロジックを修正した。
CR134107	BPMadmin ツールでは 1 つのテンプレートに 300 を超えるインスタンスをアーカイブできない。この問題は、このリリースで修正済み。
CR134360	タスクを再ルーティングするとスタックがオーバーフローすることがある。この問題の修正では、SQL の NULL 値を適切に処理するように再ルーティング ロジックを修正し、無限ループを防ぐチェックを追加した。
CR137500	負荷が高いときに BPM が NULL ポインタ例外を送出する場合がある。この問題の修正では、NULL を含む配列の代わりに NULL を返すようにイベント プロセッサを修正した。
CR172185	WebLogic Integration クラスタでは、Plug-in Configuration Manager を 1 つの管理対象サーバにのみデプロイする必要がある。この問題は、このリリースで修正済み。

確認済みの制限

この節では、BEA WebLogic Integration 7.0 SP5 ソフトウェアに関して確認されている制限事項について説明します。

変更要求

以下の表では、正式な変更要求 (CR) に記載されている制限事項を説明しています。推奨される回避策がある場合は併せて記載しています。

1	**CR063709** **CR075768**	
	問題点	2 つのピアに対して 1 つのデータベースが使用され、peer1 のデータベース テーブルが peer2 によって上書きされた場合 RosettaNet Security サンプルが例外を送出する。RosettaNet 2.0 Security サンプルのデフォルト データベースを PointBase から別の種類に簡単に変更できない。他の B2B サンプルと異なり、RosettaNet 2.0 Security サンプルでは、サンプル ドメインで使用されるデータベースの切り替えを行う WebLogic Integration データベース ウィザードの使用をサポートしない。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	できれば、異なるピアには異なるデータベースを使うようにする。たとえば、peer1 では MSSQL を使用し、peer2 では Oracle を使用する。同一マシンで、2 つのピアを稼働させる必要があり、どちらのピアも同じデータベース サーバを使う場合、次の点を順守する。 ■ MSSQL の場合－ peer1 には WLIDB、peer2 には WLIDB2 というように、各ピアに対して異なるデータベース名を使用する。 ■ Oracle の場合－ peer1 には kevin/kevin、peer2 には nina/nina というように、各ピアに対して異なる Oracle ユーザ アカウントを使用する。 `RunRN2Security` コマンド ラインに、このサンプルに使用する各データベースを次のように指定する。 `RunRN2Security` *`database_for_peer1 database_for_peer2`* `setDBVars` および `setDBVarsExt` ファイルを編集して、データベース接続パラメータを設定または変更する。`setDBVars` および `setDBVarsExt` ファイルは次の場所にある。 ■ *`SAMPLES_HOME`*`/integration/config/samples/RN2Security/config/peer1/dbInfo/`*`database_type`*

2	**CR076994**	
	問題点	クラスタでは、管理サーバおよび管理対象サーバの両方に WebLogic Integration をインストールする必要がある。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	WebLogic Integration ユーザは、管理対象サーバだけでなく管理サーバにも WebLogic Integration をインストールする。
3	**CR079611**	
	問題点	Studio の [ルーティング] ウィンドウで新しい WebLogic Server グループを作成し、新しい BPM ロールをマッピングしたときに、ロールのリストに新しいロールが表示されない。
	プラットフォーム	Windows
	回避策	Studio をシャットダウンして再起動すると、新しいロールが表示される。
4	**CR081119**	
	問題点	デフォルト インストールには RN-Hub のプロトコル定義が含まれる。しかし、RosettaNet に対する RN-Hub サポートは、サポートされていない。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	なし
5	**CR090195**	
	問題点	プラグインをロードまたはアンロードしたとき、そのプラグインを参照しない開始済みのワークフローがあると、開始ノードおよびイベント ノードのイベント リストが更新されない。
	プラットフォーム	Windows
	回避策	開いているすべてのワークフロー テンプレートを閉じてから、プラグインの状態を変更する。

6	**CR091702**	
	問題点	管理対象サーバを起動しようとすると、JVM コアダンプが生成される。VM のクラスローダ領域 (メモリ) が不足している。
	プラットフォーム	SPARC Solaris
	回避策	これは確認済みの問題であり、解決 / 回避策として -XX:MaxPermSize=128m を使用する。 SUN BugID=4761637 および DUP 4707386 の修正が 131_08 にある。
7	**CR092283**	
	問題点	既存ドメインに AI 用の BPM プラグインを作成する際のエラー。ドメインの `config.xml` ファイルに既存の BPM プラグインがある場合、`configDomain` スクリプトが失敗する。 `<WLI_HOME>\project\ai\ai_resources.xml:295: Unresolved module reference encountered: EJBComponent:WLI-BPM Server in ModuleComponent/BPM_Plugin` このエラーは、`configDomain` スクリプトで `config.xml` に Application Integration 用の BPM プラグインのエントリを追加することが原因で発生する。
	プラットフォーム	Windows
	回避策	BPM プラグインを作成するドメインの `config.xml` に BPM プラグインがすでにある場合は、そのプラグインを選択しない。
8	**CR093191**	
	問題点	WebLogic Workshop ユーザが 7.0 SP2 RDBMS アダプタのアプリケーション ビュー コントロールを作成できない。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	BEA カスタマ サポートまでお問い合わせください。

9	**CR093477**	
	問題点	XT を使用した通常の Java クラス ビジネス オペレーションが `NoClassDefFoundError` で失敗する。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	WebLogic Integration サーバ起動スクリプトは、サーバ クラスパスに `wlxtrt.jar` を含むように修正が必要 (詳細については、42 ページの「wlicommon.jar から削除された XT 実行時クラス」を参照)。
10	**CR094433**	
	問題点	フェイルオーバのために HTTP プロトコルを使用して JTA および JMS を移行する場合、不完全なワークフロー インスタンスが発生することがある。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	t3 プロトコルを使用する。
11	**CR094470**	
	問題点	`config.xml` に `<StartupClass>` または `<ShutdownClass>` モジュールが記述されている場合、`configDomain` スクリプトにより、そのモジュールに `LoadOrder` 属性が追加されるため、サーバが起動できなくなる。
	プラットフォーム	すべて

	回避策	`config.xml` で `<ShutdownClass>` および `<StartupClass>` の `LoadOrder` 属性エントリを削除してから、サーバを起動する。
		`<ShutdownClass Arguments="mode=TERMINATE"`
		`LoadOrder="800"`
		`ClassName="com.bea.b2b.server.Shutdown" Name="WLCShutdown"`
		`Targets="myserver"/>`
		`<StartupClass ClassName="com.bea.lwclient.Startup"`
		`Name="LwcStartup"`
		`Targets="myserver"/>`

12	**CR095276**	
	問題点	Domain Wizard で生成した EAI、BPM、WLI のドメインでは、ユーザが独自の管理サーバ名を指定した場合、デフォルトの Web アプリケーション ディレクトリ名に *myserver* が使用される。これはドメイン生成時に発生し、次のエラーにより管理サーバが起動できない。 `<Error> <Management> <141006> <Application eaiC:Name=DefaultWebApp_<user_specified_name>, Type=Application not found at <user_domain>\applications\ DefaultWebApp__<user_specified_name>>`
	プラットフォーム	すべて
	回避策	1. ディレクトリ名を `applications/DefaultWebApp_myserver` から `applications/` の下の `DefaultWebApp_<user_specified_name>` に変更する。 2. `config.xml` で、`DefaultWebApp_myserver` を `DefaultWebApp_<user_specified_name>` に変更する。
13	**CR095278**	
	問題点	Application Integration を使用した既存のワークフローがサンプルの DBMS アダプタで動作しない。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	複雑なアプリケーションでは、ワークフローに関係するオブジェクトすべてを再度エクスポートし、再度インポートする。 簡単なアプリケーションでは、要求 XML ドキュメントを大文字に変更する。

14	**CR096379**	
	問題点	RDBMS レルムを使用する場合、Domain Wizard で生成される WLI ドメインの `config.xml` では、`RDBMSRealm` 要素の `SchemaProperties` 属性が不完全である。
	プラットフォーム	すべて

	回避策	“`SchemaProperties=`” で始まる行の末尾にある “`PERMISSION FROM AC`” の直後に、スペースを入れずに以下のテキストを追加する。
		`PERMISSION FROM ACLENTRIES WHERE PERMISSION = ?;`
		`getUser=SELECT USERID, PASSWORD FROM WLSUSER WHERE`
		`USERID = ?;deleteGroup2=DELETE FROM ACLENTRIES WHERE`
		`PRINCIPAL = ?;deleteGroup1=DELETE FROM GROUPMEMBER`
		`WHERE GROUPID = ?;deleteUser1=DELETE FROM ACLENTRIES`
		`WHERE PRINCIPAL = ?;getAclEntries=SELECT NAME, PRINCIPAL,`
		`PERMISSION FROM ACLENTRIES WHERE NAME = ? ORDER BY`
		`PRINCIPAL;getGroupMembersGroups=SELECT GROUPMEMBERID,`
		`GROUPID FROM GROUPMEMBER WHERE GROUPID = ?;getGroups=SELECT`
		`GROUPID FROM WLSGROUP ORDER BY GROUPID;getGroup=SELECT`
		`GROUPID FROM WLSGROUP WHERE GROUPID = ?;getUsers=SELECT`
		`USERID, PASSWORD FROM WLSUSER ORDER BY USERID"/>`

15	**CR112318**	
	問題点	テンプレートから作成された WebLogic Integration ドメイン (EAI、BPM、WLI) を持つサーバを WebLogic Server Administration Console でシャットダウンできない。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	サーバをシャットダウンするには、次のいずれかを実行する。 ■ ドメインの `stopWeblogic` スクリプトを実行してサーバをシャットダウンする。 ■ シャットダウンの ACL をシステム ユーザではなく Administrators グループに変更する。その後、WebLogic Server Administration Console を使用してサーバをシャットダウンする。

16	**CR119473**	
	問題点	UNIX システムでは、サンプル起動ページの [サンプル アプリケーション] メニュー ページにある [BPM-Workshop サンプル] リンクを選択すると、ブラウザ エラー (Error 404--Not Found) が発生する。これは、ファイル名の大文字小文字が区別されることが原因である。[サンプル アプリケーション] メニュー ページは、以下の場所に格納されている。 *SAMPLES_HOME*/integration/config/samples/applications/DefaultWebApp_myserver/menu.html
	プラットフォーム	UNIX
	回避策	次のディレクトリにある BpmWlwSampleDesc.html というファイルの名前を BPMWLWSampleDesc.html に変更する。 *SAMPLES_HOME*/integration/config/samples/applications/DefaultWebApp_myserver
17	**CR134353**	
	問題点	WebLogic Integration ドメインで XA が有効化されている場合、クラッシュ後のサーバ再起動時に oracle.jdbc.xa.client.OracleXAResource.commit 呼び出しから oracle.jdbc.xa.OracleXAException が送出されることがある。この例外は害を及ぼすものではなく、クラッシュ発生前、サーバ トランザクション ログにコミットを書き込む前にコミットされたトランザクションの回復が試行されたことを示す。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	なし
18	**CR135215**	
	問題点	B2B アプリケーション使用時にメモリ不足の問題が発生することがある。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	次のフラグを使用して PermSpace を 256m に増やす。 -XX:MaxPermSize=256m これを両方のピアに対して行う。

19	**135996**	
	問題点	BPM-Workshop 相互運用性サンプルで、ListenAddress を localhost に設定すると、テストが失敗して不完全なリンクが表示される。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	プラットフォームドメインをコンフィグレーションするときに ListenAddress を空白のままにする。
20	**CR137004**	
	問題点	`isNull` 属性が true として取得された場合、イベントおよびサービスからの XML 応答に不適切な値が含まれることがある。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	なし。これらの値は無視してよい。
21	**CR177271**	
	問題点	サーバ起動時に、HTTP プラグイン用の不正な形式の `web.xml` から `SAXParserException`s に関する情報メッセージがサーバ ログに出力される場合がある。
	プラットフォーム	すべて
	回避策	なし。これらの値は無視してよい。害を及ぼすものではない。これらの例外による HTTP プラグイン機能への影響はない。

クラスタでの Oracle データベースと WebLogic Integration の使用

Oracle データベースが動作しているクラスタで WebLogic Integration を使用する場合は、特定のワークフロー インスタンスに対する同時更新を避けるために、デプロイメント記述子を変更する必要があります。デプロイメント記述子を変更すると、`WorkflowInstance` エンティティ Bean に影響します。以下の修正を行ってください。

- `WorkflowInstance` Bean の同時実行方法を `Exclusive` から `Database` に変更する。コード リスト 1 を参照。
- トランザクション アイソレーションを `TRANSACTION_READ_COMMITTED` から `TRANSACTION_READ_COMMITTED_FOR_UPDATE` に変更する。コード リスト 2 を参照。

注意： 既存の WebLogic Integration クラスタ ドメインに対してこれらの変更を行った場合、この変更を有効にするには、各管理対象サーバのステージング領域を削除する必要があります。

`<BEA_HOME>/weblogic700/integration/lib/wlpi-ejb.jar/META-INF` ディレクトリにある `weblogic-ejb-jar.xml` ファイルを更新した例を次に示します。

コード リスト **1** 同時実行方法の更新

```
<weblogic-enterprise-bean>
    <ejb-name>WorkflowInstance</ejb-name>
    <entity-descriptor>
      <entity-cache>
        <max-beans-in-cache>100</max-beans-in-cache>
        <idle-timeout-seconds>600</idle-timeout-seconds>
        <concurrency-strategy>Database</concurrency-strategy>
<cache-between-transactions>False</cache-between-transactions>
      </entity-cache>
```

コード リスト **2** トランザクション アイソレーションの更新

```
<transaction-isolation>
     <isolation-level>TRANSACTION_READ_COMMITTED_FOR_UPDATE</isolation-level>
     <method>
       <ejb-name>WorkflowInstance</ejb-name>
       <method-name>*</method-name>
     </method>
 </transaction-isolation>
```

Studio ワークフロー ウィンドウの点滅

Studio の [ワークフロー設計] ウィンドウでノードのコピーや貼り付けなどのさまざまなアクションを実行すると、ワークフロー ウィンドウが点滅します。これは確認済みの制限事項であり、CR090095 に報告されています。

DB2 オプションは Domain Wizard では提供されない

WebLogic Integration では DB2 をサポートしていないので、Domain Wizard (`wliconfig`) で `wlidomain`、`bpmdomain`、または `eaidomain` テンプレートを使用してドメインを作成する場合に、[データベースの作成] および [データベースの切り替え] のオプションとして DB2 は提供されません。この問題は、CR082305 に報告されています。ハードウェアおよびソフトウェア要件などの、プラットフォーム サポートについては、以下のサイトの「サポート対象プラットフォーム」ページを参照してください。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.html`

BPM コマンドライン ユーティリティがハングしたように見える

BPM コマンドライン ツールがハングしたように見える場合があります。これは処理完了までの所要時間が長いことが原因です。ツールはハングしているのではなく、処理を実行中であり、処理が終わると戻ります。

ドキュメントの追加、変更、および訂正

この節には、次の URL にある BEA ドキュメント Web サイトの WebLogic Integration ドキュメントに対する追加、変更、および訂正を記載しています。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/index.html`

閉じた環境にアプリケーション ビューをデプロイする際に発生する問題の回避策

閉じた環境 (WebLogic Server を実行中のマシンに、http を介したアクセスがない環境) にアプリケーション ビューをデプロイすると、問題が発生します。システムから `weblogic-ra.xml` をアップロードすることができないにもかかわらず、WLAI アップロード EJB がアップロードされた XML の検証を実行しようとするため、例外が送出されます。これを回避するには、WebLogic Server Administration Console を使用して XML レジストリに手動で DTD を追加します。この処理によって、`weblogic-ra.xml` をローカルで解決できるようになります。

`weblogic-ra.xml` を XML レジストリに追加するには

1. WebLogic Server Administration Console を起動します。
2. 左ペインで [サービス｜ XML ｜ WLPIXML_Registry ｜ XML Spec Entries] ノードをクリックして展開します。
3. 右ペインの [新しい XML Entity Spec Registry Entry のコンフィグレーション] をクリックします。

4. [パブリック ID] フィールドに、`-//BEA Systems, Inc.//DTD WebLogic 7.0.0 Connector//EN` と入力します。
5. [システム ID] フィールドに、`http://www.bea.com/servers/wls700/dtd/weblogic700-ra.dtd` と入力します。
6. [エンティティ URI] フィールドに、`weblogic700-ra.dtd` と入力します。
7. [作成] をクリックします。
8. `weblogic.jar` ファイルから次のディレクトリに `weblogic700-ra.dtd` を抽出します。

   `DOMAIN_HOME``/xml/registries/WLPIXML_Registry`

   `DOMAIN_HOME` は、ドメインのルートへの絶対パスです。

この問題は、CR093035 に報告されています。

WebLogic Server セキュリティ ドキュメントのリンクの変更

『B2B Integration セキュリティの実装』の「キーストアのコンフィグレーション」にある「キーストアの作成およびコンフィグレーション手順」で、『WebLogic Security プログラマーズ ガイド』の「セキュリティの基礎概念」のリンクが無効になりました。無効になったリンクを含むドキュメントは、次の URL に掲載されています。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/b2bsecur/keystore.htm`

現在、『WebLogic Security の紹介』の「セキュリティの基礎概念」は、次の URL に掲載されています。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/secintro/concepts.html`

この問題は、CR102614 に報告されています。

BPM プラグイン サンプルの説明に対する訂正

該当箇所は、次の URL にある『WebLogic Integration BPM プラグイン プログラミング ガイド』の「BPM プラグイン サンプル」の「プラグイン サンプルの実行」の記述です。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/devplug/example.htm`

記載されている指示を実行すると、UNIX システムでは次のエラーが発生します。

```
Exception in thread "main"
java.lang.NoClassDefFoundError:com/bea/wlpi/tour/po/plugin/
StartOrderDriver
```

手順 4b を次の情報に置き換えてください。

b. UNIX では、次のコマンドを使用して、環境と `CLASSPATH` 変数を設定し、`StartOrderDriver` スクリプトを実行します。

```
$WLI_HOME/setenv.sh
CLASSPATH=
$WL_HOME/lib/weblogic.jar:$WLI_HOME/lib/wlpi-ejb.jar:
 $WLI_HOME/lib/sampleplugin-ejb.jar
$JAVA_HOME/bin/java -classpath "$CLASSPATH"
 com.bea.wlpi.tour.po.plugin.StartOrderDriver
 t3://localhost:7001 joe password
```

この問題は、CR112459 に報告されています。

Data Integration プラグイン サンプル アプリケーションの実行に関する訂正

『Data Integration プラグイン ユーザーズ ガイド』の「WebLogic Integration サンプル アプリケーションの実行」で「ステップ 1. Sample Application Launcher の起動」にある図 3-1 および図 3-2 が、図 1 および図 2 に示すように更新されました。これらの図は次の URL にあります。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/diplugin/wlpisamp.htm`

注意： これらの図は、以下のように、サンプル起動ページの左ペインから非推奨のサンプル (Hello Partner、Channel Master、および Messaging API) が削除され、タイプ ミスが修正されました。

図 **1** 図 **3-1**「**Sample Application Launcher**」への変更

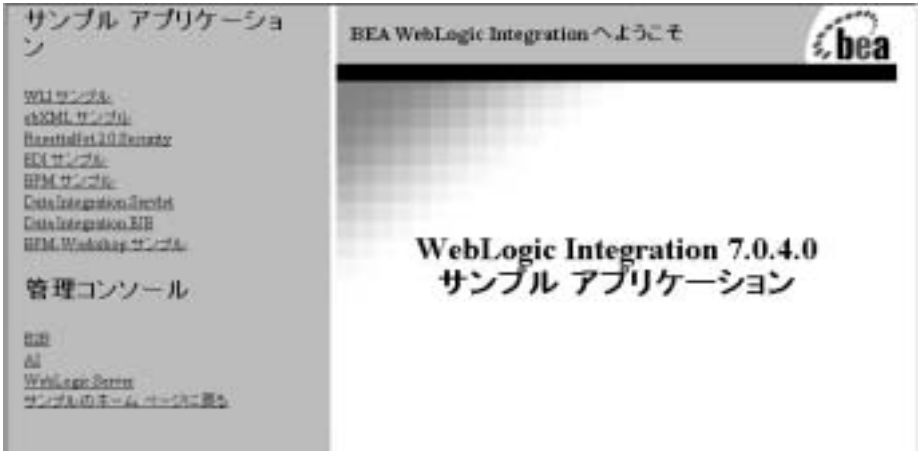

図 **2** 図 **3-2**「**Data Integration Servlet** サンプル ページ」への変更

『Data Integration プラグイン ユーザーズ ガイド』の「WebLogic Integration サンプル アプリケーションの実行」にある「EJB サンプルの実行」で、コマンド ラインから EJB サンプルを実行する手順に、*WL_HOME* 環境変数の現在の定義を反映する必要があります。この手順は、次の URL にあります。

http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/diplugin/wlpisamp.htm

該当箇所は、「コマンド ラインから」の節です。手順 3 を次の情報に置き換えてください。

3. 環境変数 *WL_HOME* をディレクトリのパス名として設定します。
   ここには、WebLogic Server がインストールされています。たとえば、次のようになります。

```
set WL_HOME=c:\bea\weblogic700\server
```

この問題は、CR112455 に報告されています。

テンプレート定義の互換性

WebLogic Integration 7.0 のさまざまなリリースで作成、使用するテンプレート定義の互換性表が記載されていません。

表 2 に不足していた情報を示します。たとえば、この表の 1 番目の行から、WebLogic Integration 2.1 SP2 で作成したテンプレート定義はすべてのバージョンで使用できることがわかります。これに対し、2 番目の行からは、WebLogic Integration 7.0 GA で作成したテンプレート定義は、WebLogic Integration 2.1 SP2 リリースで使用できないことがわかります。

表 **2.** テンプレート定義の互換性

バージョン	**互換性**					
	2.1 SP2	**7.0 GA**	**7.0 SP1**	**7.0 SP2**	**7.0 SP4**	**7.0 SP5**
2.1 SP2	あり	あり	あり	あり	あり	あり
7.0 GA	なし	あり	あり	あり	あり	あり
7.0 SP1	なし	あり	あり	あり	あり	あり
7.0 SP2	なし	なし *	なし *	あり	あり	あり
7.0 SP4	なし	なし *	なし *	あり	あり	あり

* 7.0 GA および 7.0 SP1 のバグが原因です。

7.0 SP5	なし	なし *	なし *	あり	あり	あり

* 7.0 GA および 7.0 SP1 のバグが原因です。

この問題は、CR084741 に報告されています。

「B2B Console へのインポート」への更新

『B2B Integration 管理ガイド』の「B2B Console へのインポート」にある図 4-4 「B2B の [インポート] タブ」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/b2badmin/impexp.htm) の下に、次の記述があります。

警告 : [データベースの初期化] オプションを選択すると、その後リポジトリ データをインポートする際に、既存のデータは破棄されます。[データベースの初期化] オプションの選択は慎重に行う必要があります。

この警告を次のように変更します。

警告 : [データベースの初期化] オプションを選択すると、その後リポジトリ データをインポートする際に、既存のデータは破棄されます。そのため、インポートする `config` ファイルには必要なすべての情報が入っている必要があります。`config` ファイルに未解決の参照がないようにしてください。[データベースの初期化] オプションの選択は慎重に行う必要があります。

さらに、『B2B Integration 管理ガイド』の「B2B Console へのインポート」にある「ステップ 11. [ビジネス接続インポート ファイル] に対して [Yes] または [No] を選択します」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/b2badmin/impexp.htm) に、次の注意を追加してください。

注意 : ビジネス接続トレーディング パートナをインポートする場合、[データベースの初期化] ラジオ ボタンを [No] に設定する必要があります。

この問題は、CR089818 に報告されています。

「カスタム例外ハンドラの使い方」への追加

『WebLogic Integration BPM ユーザーズ ガイド』の「カスタム例外ハンドラの使い方」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/bpmtutor/ch6.htm) で、箇条書きリストの下に次の注意を追加してください。

注意： カスタム ExceptionHandler から例外が発生した場合、ワークフロー終了時にシステム ExceptionHandler が呼び出されます。

この問題は、CR089006 に報告されています。

configDomain ドキュメントの場所

`configDomain.cmd` は BEA WegLogic Integration のドキュメントに記載されていません。ドキュメントは、次の URL にある BEA dev2dev Web サイトからダウンロードできます。

```
http://dev2dev.bea.com/codelibrary/code/appview_control.jsp
```

コンフィグレーション ウィザードで WebLogic Platform または WebLogic Workshop 以外のテンプレートを使用して作成されたドメインの場合、WebLogic Integration は `configDomain` という名前のスクリプトを提供します。このスクリプトによって、ドメインで WebLogic Integration の Application Integration コンポーネントをホストし、Application Integration がドメイン内の適切なデータベースを使用するようにコンフィグレーションできます。

この問題は、CR090681 に報告されています。

テンプレート定義情報に関する訂正

『WebLogic Integration Studio ユーザーズ ガイド』で、「ワークフロー テンプレートの定義」の節にある「テンプレート定義に関する作業」の第 4 段落に対して、次の訂正が必要です。URL は次のとおりです。

```
http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/studio/ch5.htm
```

一方、複数のアクティブなテンプレート定義を持つことは可能ですが、実際に実行時にインスタンス化されるのは 1 つのテンプレート定義のみです。アクティブなテンプレート定義は、次の範囲にあるアクティブなテンプレート定義を検索して決定されます。

```
effective_date_time <= current_query_date_time <=
expiry_date_time
```

テンプレート定義は有効日時の降順に検索されます。最新の有効日時 (クエリの日時に最も近い日時) を持つテンプレート定義がインスタンス化されます。クエリの基準は最終更新日時ではありません。通常、有効日時を既存のテンプレート定義の日時より前の日時に変更しない限り、最後に作成したテンプレート定義がインスタンス化されます。

この問題は、CR085261 に報告されています。

プラグインのデプロイ手順に関する補足

以下は、新しい BPM プラグインをデプロイするときに必要な手順に関する補足です。次の URL にある『WebLogic Integration BPM プラグイン プログラミング ガイド』の「プラグインのデプロイメント」に、以下の記述を追加してください。

```
http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/devplug/deploy.htm
```

プラグインのデプロイは `config.xml` ファイルを編集することによって完了しますが、`application.xml` ファイルにエントリを追加することも必要です。

新しいプラグインをデプロイするには、以下の手順を実行します。

1. `<new-plugin-ejb.jar>` ファイルを次のディレクトリにコピーします。

   `BEA_HOME``\weblogic700\integration\lib`

   この *`BEA_HOME`* は、WebLogic Platform ホームです。

2. ドメイン ディレクトリにある `config.xml` ファイルを編集します。
   `Application Deployed="true" Name="WLI"` タグの下に以下を入力してください。

   ```
   <EJBComponent Name="New Plug-in" Targets="myserver"
   URI="New-plugin-ejb.jar"/>
   ```

3. *BEA_HOME\weblogic700\integration\lib\META-INF* の `application.xml` ファイルを編集します。`Plug-ins` タグの下に、以下のとおりに入力してください。

```
<!--Plugins-->

  <module>
    <ejb>New-plugin-ejb.jar</ejb>
  </module>
```

4. サーバを再起動します。新しいプラグインが Studio に表示されます。

この問題は、CR095879 に報告されています。

「weblogic.Admin コマンドライン ユーティリティを使用する方法」に対する変更

次の URL にある『WebLogic Integration ソリューションのデプロイメント』の「weblogic.Admin コマンドライン ユーティリティを使用する方法」で、

```
http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/deploy/highav.htm
```

コマンドラインが次の太字のように変更されました。

```
java weblogic.Admin [-url t3://hostname:port]
[-username username]
[-password password]
. . .
```

さらに、次の注意を追加してください。

注意： HTTP プロトコルを使用するには、管理サーバで HTTP トンネリングをオンにする必要があります。詳細については、『WebLogic Server 管理者ガイド』の「HTTP トンネリングのための WebLogic Server の設定」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/adminguide/web_server.html) を参照してください。

この問題は、CR093487 に報告されています。

「Web サーバおよび WebLogic プロキシ プラグインでの WebLogic Integration のコンフィグレーション」に関する訂正

『B2B Integration セキュリティの実装』の「Web サーバおよび WebLogic プロキシ プラグインでの WebLogic Integration のコンフィグレーション」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/b2bsecur/config.htm) で、注意の第 1 段落を次のように変更します。

ファイアウォールの内側にある WebLogic Integration の URI エンドポイントは、ファイアウォールの外側にある WebLogic Integration の URI エンドポイントと正確に一致する必要があります。ファイアウォールの外側にある WebLogic Integration は HTTPS を指定するため、ファイアウォールの内側にあるサーバの URI エンドポイントも、HTTPS を指定する必要があります。ただし、ファイアウォールの内側にあるプロキシ サーバと WebLogic Integration 間の通信は HTTP です。URI エンドポイントの詳細については、http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/b2bsecur/config.htm にある「セキュアな転送方式のコンフィグレーション」を参照してください。

「クラスタ対応リソース」に対する変更

『WebLogic Integration ソリューションのデプロイメント』の「クラスタ対応リソース」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/deploy/cluster.htm) で、表 2-1 にある次の注意を変更します (3 行目 [B2B Single node] の 3 列目 [WLI-B2B Startup])。

注意： 管理サーバおよびクラスタ化管理対象サーバにデプロイされます。

変更後の注意は次のとおりです。

注意： `b2b-startup.jar` は WebLogic Integration 7.0 のクラスタ対応サービスであり、クラスタを対象にできます。クラスタの設計に応じて、`b2b-startup.jar` は管理サーバと管理対象サーバにデプロイする必要があるか、クラスタを対象にするだけでかまいません。管理サーバがクラスタに属している場合、`b2b-startup.jar` の対象をクラスタにします。ただし、管理サーバがクラスタに属していない場合は、

`b2b-startup.jar` の対象を管理サーバおよび管理対象サーバにします。

「メール セッションの設定」への追加

『Data Integration プラグイン ユーザーズ ガイド』の「ステップ 2. メール セッションの設定」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/diplugin/wlpisamp.htm) に、次の注意を追加します。

注意： WebLogic Server コンソールでメール セッションを設定した場合、メール セッションがサーバで完全に再開始されるためには、サーバを再起動する必要があります。

この問題は、CR89616 に報告されています。

「リポジトリに XML エンティティをインポートする」への追加

『WebLogic Integration Studio ユーザーズ ガイド』の「リポジトリに XML エンティティをインポートする」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/studio/ch4.htm) で、次の太字の部分をステップ 2 に追加します。

[名前] フィールドに、追加するエンティティに固有な名前を**拡張子 .xsl** を付けて入力します。

この問題は、CR092339 に報告されています。

「バイナリから XML への変換」に関する変更

『WebLogic Integration データ変換』の「バイナリから XML へ」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/diuser/runtime.htm) で、リスト 6-1 の 17 行目は次のようになっています。

```
String xml = wlxt.getXMLText(doc, 0, 2);
```

これを次のように変更します。

```
String encoding =
  wlxt.extractEncodingFromXMLSource(mflDocumentName);
    String xmlText = wlxt.stringDOM(doc, 0, 2, encoding);
```

この問題は、CR092574 に報告されています。

「システム パスワードの更新」に関する補足

『WebLogic Integration の起動、停止およびカスタマイズ』の「システム パスワードの更新」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/config/custom.htm) で、ステップ 2 は次のようになっています。

> ナビゲーション ツリーから [ユーザ] を選択して [ユーザ] ページを開きます。

これを次のように変更します。

> ナビゲーション ツリーの [以前のセキュリティ] ノードから [ユーザ] を選択して [ユーザ] ページを開きます。

この問題は、CR090973 に報告されています。

「ビジネス カレンダーの管理」への追加

『WebLogic Integration Studio ユーザーズ ガイド』の「ビジネス カレンダーの管理」(http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/studio/ch3.htm) に、次の注意を追加します。

注意： 時限ノードを使用する場合、BUS_HOURS および BUS_DAYS を時間計算に使用する場合にのみ、ビジネス カレンダーを使用します。他の時間間隔を使用すると、デフォルトのカレンダーが使用されます。

この問題は、CR120058 に報告されています。

インストール

この節では、WebLogic Integration 7.0 SP5 のインストールと移行について説明します。この節の内容は次のとおりです。

- 完全インストール
- アップグレード インストール
- 移行

完全インストール

WebLogic Integration 7.0 SP5 は標準の BEA WebLogic Platform インストーラを使用しています。WebLogic Integration 7.0 SP5 では完全インストールの手順に対する変更はありません。

アップグレード インストール

既存の WebLogic Integration のインストールを次のように更新するアップグレード インストーラが用意されています。

- WebLogic Integration 7.0 から WebLogic Integration 7.0 SP5 へ
- WebLogic Integration 7.0 SP1 から WebLogic Integration 7.0 SP5 へ
- WebLogic Integration 7.0 SP2 から WebLogic Integration 7.0 SP5 へ
- WebLogic Integration 7.0 SP4 から WebLogic Integration 7.0 SP5 へ

WebLogic Integration 7.0 SP5 は、ユーザによる変更が可能なファイルをバックアップしてから既存のインストールの上にインストールする、標準の BEA アップグレード インストーラを使用しています。サービス パックのアップグレードを実行する手順については、次の URL にある「WebLogic Platform のインストール」を参照してください。

```
http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/install/index.
html
```

WebLogic Integration 7.0、7.0 SP1、または 7.0 SP4 から WebLogic Integration 7.0 SP5 に既存のデータベースを移行する場合、File Plug-in 用の BPM データベースを更新する必要があります。詳細については、次の URL にある『File Plug-in ユーザーズ ガイド』の「BPM データベース テーブルの更新」を参照してください。

`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/fileplug/fileplua.htm`

RDBMS アダプタ

RDBMS アダプタは、以前は dev2dev Web サイトからダウンロードできましたが、現在は WebLogic Integration 7.0 SP5 に付属しています。アダプタの ear ファイルは `<INTEGRATION_HOME>/adapters/rdbms/lib` に格納されています。アダプタ データベース スクリプトは `<INTEGRATION_HOME>/adapters/rdbms/scripts` にあります。

移行

次の移行パスがあります。

- コンフィグレーション ウィザードを使用して作成したドメインの移行
- WebLogic Integration 7.0 SP2 以前のバージョンからの移行

コンフィグレーション ウィザードを使用して作成したドメインの移行

WebLogic Integration 7.0 のコンフィグレーション ウィザードを使用して作成された既存のドメインを移行する場合は、次の URL にある『WebLogic Platform 7.0 Service Pack 5 リリース ノート』の「コンフィグレーション ウィザードを使用して作成されたドメインを移行する」を参照してください。

http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/relnotes/relnotes.html

WebLogic Integration 7.0 SP2 以前のバージョンからの移行

以下の内容は、WebLogic Integration 7.0、WebLogic Integration 7.0 SP1、または WebLogic Integration 7.0 SP2 から WebLogic Integration 7.0 SP5 に移行する場合を対象としています。

JSP Worklist へ移行するには、次の URL にある『WebLogic Integration JSP Worklist ユーザーズ ガイド』の「JSP Worklist への移行」を参照してください。

http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/jspwlist/ch5.htm

以下の内容は、WebLogic Integration 7.0 または WebLogic Integration 7.0 SP1 から WebLogic Integration 7.0 SP5 に移行する場合を対象としています。

File Plug-in へ移行するには、次の URL にある『File Plug-in ユーザーズ ガイド』の「移行したドメインのための File Plug-in のコンフィグレーション」を参照してください。

http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wli/docs70/fileplug/fileplua.htm

wlicommon.jar から削除された XT 実行時クラス

WebLogic Integration 7.0 SP2 では、XT 実行時クラスが `wlicommon.jar` から削除されました。`wlicommon.jar` 内のクラスを必要とするクライアントには、`wlxtrt.jar` のクラスを使用する必要があります。この変更は、特定の EJB インタフェースをサーバ クラスパスから削除するために必要でした。

特別な状況では、これによってワークフロー実行が `NoClassDefFound` エラーで失敗することがあります。これは、ワークフローで、標準の Java クラス ビジネス オペレーションを使用して XT アクションを実行する場合に発生します。そのような場合、`wlxtrt.jar` を含むように WebLogic Integration サーバのクラスパスを変更する必要があります。

RosettaNet スキーマの変更点

WebLogic Integration では、WebLogic Integration 7.0 SP2 以降、最新の RNIF 2.0 仕様を使用しています。WebLogic Integration 7.0 SP1 以前のものを使用している場合は、既存のドメインに使用する次の RosettaNet スキーマを更新する必要があります。

```
RN2GlobalBusinessSignalCode.xsd
```

このスキーマを更新するには、このバージョンの WebLogic Integration でリリースされたスキーマを既存ドメインにコピーします。
RN2GlobalBusinessSignalCode スキーマは次のディレクトリにあります。

```
BEA_HOME\weblogic700\integration\lib\xmlschema\rosettanet
```

この *BEA_HOME* は、WebLogic Platform ホームです。

WebLogic Integration での Oracle XA の使用

この節では、Oracle XA データベースを使用するように WebLogic Integration をコンフィグレーションする方法を説明します。サポート対象データベース タイプについては、次の URL にある「サポート対象プラットフォーム」を参照してください。

```
http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/platform/docs70/support/index.
html
```

XA に変更が必要

XA を使用するようにドメインを設定するには、次の手順を実行します。

- 手順 1 : サーバ起動スクリプトの編集
- 手順 2 : Setenv スクリプトの編集
- 手順 3 : データベース サーバ上での XA の有効化

- 手順 4 : データベース スクリプトの編集
- 手順 5 : config.xml の編集
- 手順 6 : fileRealm.properties の編集

手順 1 : サーバ起動スクリプトの編集

XA を WebLogic Integration に対して有効にする必要があります。XA を使用するすべてのドメインの `startWeblogic` および `startManagedWeblogic` スクリプトに、次のオプションを追加します。

```
-Dbea.eci.repository.useXa=true
```

手順 2 : Setenv スクリプトの編集

正しいドライバ バージョンを使用するように環境を設定する必要があります。Oracle クライアント、ドライバ、およびサーバの互換性について不確かな場合は、45 ページの「Oracle クライアント、ドライバ、サーバのバージョンの互換性 (非 XA および XA)」を参照してください。

使用するドライバのタイプ (Oracle Thin ドライバまたは WebLogic jDriver) に応じて、`setenv` スクリプトを編集します。jDriver は Microsoft SQLServer でのみサポートされます。

Oracle Thin ドライバ (非 xa および XA)

次のように、使用する Oracle クライアントのバージョンに応じて、該当するディレクトリの `classes12.zip` を *`WL_HOME`*`\server\lib` にコピーします。

```
WL_HOME\server\ext\jdbc\oracle\817
WL_HOME\server\ext\jdbc\oracle\901
WL_HOME\server\ext\jdbc\oracle\920
```

WebLogic jDriver (非 xa および XA)

`setenv` スクリプト (*`BEA_HOME`*`\weblogic700\integration\setenv`) を編集し、正しいドライバ バージョン (`oci817_8`、`oci901_8`、または `oci920_8`) を指定します。`oci` ディレクトリの正しいバージョンを指定した後、`setenv` スクリプトは `PATH` (Windows システム) または `LIBRARY_PATH` (Windows システム以外) を設定して、以下のいずれかのディレクトリの下にある正しい `oci` ディレクトリを指定します。

- **Windows**

```
WL_HOME/bin/oci817_8
WL_HOME/bin/oci901_8
WL_HOME/bin/oci920_8
```

- **Solaris**

```
WL_HOME/lib/solaris/oci817_8
WL_HOME/lib/solaris/oci901_8
WL_HOME/lib/solaris/oci920_8
```

注意： WebLogic Integration に付属の `setenv` スクリプトを使用しない場合は、正しい `oci` ディレクトリを指す以下のパス指定を手動で設定します。

Windows

```
set
PATH=%WL_HOME%\server\bin\oci_driver_version;%ORACLE_HOME%\b
in;%PATH%
```

Solaris

```
$ export LD_LIBRARY_PATH=
$WL_HOME/server/lib/solaris/oci_driver_version:
$ORACLE_HOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH
```

Oracle クライアント、ドライバ、サーバのバージョンの互換性 (非 XA および XA)

この節では、Oracle クライアント、ドライバ、およびサーバ間の互換性に関する考慮事項について説明します。

Oracle Thin ドライバ

- WebLogic Server と WebLogic Integration を実行するマシンに Oracle クライアントをインストールする必要はありません。Oracle クライアントを同じマシンにインストールした場合、Oracle クライアントのバージョンは無視されます。
- WebLogic Server 7.0 SP5 では、Oracle 用のデフォルトの `type 4` ドライバは 10g です。このドライバには、マルチバイト文字の問題に対処する Oracle のパッチが含まれています。このファイルは *`WL_HOME`*`/server/lib/classes12.zip` にあります。

Weblogic jDriver

WebLogic Server と WebLogic Integration を実行するマシンに Oracle クライアントをインストールする必要があります。

手順 3 : データベース サーバ上での XA の有効化

データベース サーバ上で XA が有効化されていることを確認するには、システム ユーザとして `sqlplus` にログオンし、`DBA_PENDING_TRANSACTIONS` の選択権を public に付与します。

Oracle 8.1.7 データベース サーバ

```
>sqlplus sys/sys_password@TNSNAME
SQL> grant select on DBA_PENDING_TRANSACTIONS to public;
```

Oracle 9i データベース サーバ

```
$sqlplus /nolog
SQL> connect sys/sys_password@TNSNAME as sysdba
SQL> grant select on DBA_PENDING_TRANSACTIONS to public;
```

手順 4 : データベース スクリプトの編集

`wliconfig (switchdb)` スクリプトは XA データベースでは使用できません。使用する JDBC 非 XA ドライバに応じて、その非 XA ドライバを指定するように `DB_URL` と `DB_DRIVER` を設定します。`config.xml` ファイルで XA に関係した変更を行う前に、正しい JDBC ドライバ情報を指定した `wliconfig (switchdb)` スクリプトを実行します。

Oracle Thin ドライバ

```
DB_URL=jdbc:oracle:thin:@(description=(address=(host=
<ORACLE_HOST>)(protocol=tcp)(port=<ORACLE_PORT>))
(connect_data=(sid=<ORACLE_SID>)))
```

```
DB_DRIVER=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
```

WebLogic jDriver

WebLogic jDriver の場合、DB_URL 定義内にサーバ プロパティを設定します。bulkloader を正しく機能させるには、この形式の定義を使用する必要があります。

```
DB_URL=jdbc:weblogic:oracle:(description=(address=
(host=<ORACLE_HOST>)(protocol=tcp)(port=<ORACLE_PORT>))
(connect_data=(sid=<ORACLE_SID>)))

DB_DRIVER=weblogic.jdbc.oci.Driver
```

手順 5 : config.xml の編集

正しいドライバ情報を指定して wliconfig (switchdb) スクリプトを実行した後、以下の手順に従って config.xml ファイルを変更します。使用するドメインに応じて、XA に追加する必要のある JDBC 接続プールが少なくなる場合があります。たとえば、BPM ドメインに必要な JDBC 接続プールは 2 つですが、WLI ドメインには 3 つのプールが必要です。

注意 : config.xml は、必ずバックアップを作成してから変更してください。

1. 既存の非 XA wliPool を選択し、名前を jmsPool に変更して、jmsPool を作成します。

   JMS で非 XA プールが使用される理由については、http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/faq/jms.html を参照してください。

2. BPM 用の新しい XA プール (wliPool) の追加

   a. jmsPool から JDBCConnectionPool 要素全体をコピーし、config.xml ファイルに貼り付けます。

   b. DriverName プロパティを oracle.jdbc.xa.client.OracleXADataSource (XA Oracle Thin ドライバ) または weblogic.jdbc.oci.xa.XADataSource (XA WebLogic jDriver) に変更します。

   c. Name プロパティを wliPool に変更します。

3. B2B 用の新しい XA プール (wliPool2) の追加

   a. wliPool から JDBCConnectionPool 要素全体をコピーし、config.xml ファイルに貼り付けます。

   b. Name プロパティを wliPool2 に変更します。

   次のサンプルは、3 つの JDBC 接続プールそれぞれ (JMS、BPM、および B2B) の jDriver ドライバ エントリを示しています。

```
<JDBCConnectionPool CapacityIncrement="2"
DriverName="oracle.jdbc.driver.OracleDriver"
InitialCapacity="8" LoginDelaySeconds="1" MaxCapacity="36"
Name="jmsPool" Properties="user=scott;password=tiger"
RefreshMinutes="0" ShrinkPeriodMinutes="15"
ShrinkingEnabled="true" Targets="mycluster"
URL="jdbc:oracle:thin:@(description=(address=(host=quandary)
(protocol=tcp)(port=1521))(connect_data=(sid=quadary9i)))"/>
```

または

```
<JDBCConnectionPool CapacityIncrement="2"
 DriverName="weblogic.jdbc.oci.Driver"
 InitialCapacity="8" LoginDelaySeconds="1" MaxCapacity="36"
 Name="jmsPool"
 Properties="user=scott;password=tiger;server=quandary9i"
 RefreshMinutes="0" ShrinkPeriodMinutes="15"
 ShrinkingEnabled="true"
 Targets="mycluster"
 URL="jdbc:weblogic:oracle"/>
```

非 XA WebLogic jDriver に対して両方の形式の URL 定義を使用できます。2 番目の形式を使用する場合は、`wliconfig` (`switchdb`) スクリプトを実行した後、サーバ プロパティを手動で `Properties` に追加する必要があります。

以前のバージョンからアップグレードする場合、独自に定義した JDBCConnectionPool があるときは、XA ドライバを使用するすべての JDBCConnectionPool ノードに次の属性を追加する必要があります。

```
XAPreparedStatementCacheSize="0"
```

注意： WebLogic jDriver XA ドライバに URL は必要ありません。`server` プロパティを `Properties` に追加する必要があります。

次のサンプルは、3 つの JDBC 接続プールそれぞれ (JMS、BPM、および B2B) の Oracle Thin ドライバ エントリを示しています。

```
<JDBCConnectionPool CapacityIncrement="2"
 DriverName="weblogic.jdbc.oci.Driver"
 InitialCapacity="8" LoginDelaySeconds="1" MaxCapacity="36"
 Name="jmsPool" Properties="user=scott;password=tiger"
 RefreshMinutes="0" ShrinkPeriodMinutes="15"
 ShrinkingEnabled="true"
 Targets="mycluster"
 URL="jdbc:oracle:thin:@(description=(address=(host=quandary)
 (protocol=tcp)(port=1521))(connect_data=(sid=quadary9i)))"/>
```

```
<JDBCConnectionPool CapacityIncrement="2"
 DriverName="oracle.jdbc.xa.client.OracleXADataSource"
```

```
 InitialCapacity="8" LoginDelaySeconds="1" MaxCapacity="36"
 Name="wliPool" Properties="user=scott;password=tiger"
 RefreshMinutes="0" ShrinkPeriodMinutes="15"
 ShrinkingEnabled="true" Targets="mycluster"
 URL="jdbc:oracle:thin:@(description=(address=(host=quandary)
 (protocol=tcp)(port=1521))(connect_data=(sid=quadary9i)))"
 XAPreparedStatementCacheSize="0"/>
```

```
<JDBCConnectionPool CapacityIncrement="2"
 DriverName="oracle.jdbc.xa.client.OracleXADataSource"
 InitialCapacity="8" LoginDelaySeconds="1" MaxCapacity="36"
 Name="wliPool2" Properties="user=scott;password=tiger"
 RefreshMinutes="0" ShrinkPeriodMinutes="15"
 ShrinkingEnabled="true"
 Targets="mycluster"
 URL="jdbc:oracle:thin:@(description=(address=(host=quandary)
 (protocol=tcp)(port=1521))(connect_data=(sid=quadary9i)))
 XAPreparedStatementCacheSize="0""/>
```

4. `WLCHub.DS` の `JDBCTxDataSource` を、`wliPool2` を使用するように変更します。

```
<JDBCTxDataSource EnableTwoPhaseCommit="true"
 JNDIName="WLCHub.DS" Name="WLCHub.DS"
 PoolName="wliPool2" Targets="myserver"/>
```

`JDBCTxDataSource` プロパティは指定されたままとし、JNDI 名を `com.bea.wlpi.TXDataSource`、プール名を `wliPool` にします。

```
<JDBCTxDataSource EnableTwoPhaseCommit="true"
 JNDIName="com.bea.wlpi.TXDataSource"
 Name="TXDataSource" PoolName="wliPool" Targets="myserver"/>
```

5. すべての `JMSJDBCStore` プロパティを、接続プールとして `wliPool` ではなく `jmsPool` を使用するように変更します。

```
<JMSJDBCStore Name="JMSWLIStore" ConnectionPool="jmsPool"
 PrefixName="SPOKE___user1"/>
```

6. `JDBCDataSource` については、JNDI 名を `WLAI_DataSource` のままにしますが、プール名を `jmsPool` に変更します。

```
<JDBCDataSource JNDIName="WLAI_DataSource"
 Name="WLAI_DataSource"
 PoolName="jmsPool" Targets="myserver"/>
```

7. `<domain>/wlai` にある `wlai.properties` ファイルに以下の行を追加します。

```
wlai.repositoryDatasourceName=com.bea.wlpi.TXDataSource
```

手順 6 : fileRealm.properties の編集

ドメイン ディレクトリにある fileRealm.properties ファイルで、新しい JDBC 接続プールに ACL プロパティを追加します。新しいプールごとに次の ACL プロパティを追加する必要があります。

```
acl.reset.weblogic.jdbc.connectionPool
acl.reserve.weblogic.jdbc.connectionPool
acl.shrink.weblogic.jdbc.connectionPool
```

たとえば、jmsPool および wliPool2 (既存の wliPool があることに注意) のプロパティを追加するには、次の ACL を追加します。

```
acl.reset.weblogic.jdbc.connectionPool.wliPool2=wlcSamplesUser,
wlisystem,admin

acl.reset.weblogic.jdbc.connectionPool.jmsPool=wlcSamplesUser,
wlisystem,admin

acl.reserve.weblogic.jdbc.connectionPool.wliPool2=wlisystem,
everyone

acl.reserve.weblogic.jdbc.connectionPool.jmsPool=wlisystem,
everyone

acl.shrink.weblogic.jdbc.connectionPool.wliPool2=
wlcSamplesUser,wlisystem,admin

acl.shrink.weblogic.jdbc.connectionPool.jmsPool=wlcSamplesUser,
wlisystem,admin
```

考慮事項と制限事項

XA データベースを使用するように config.xml を編集した後に、wliconfig (switchdb) スクリプトを実行しないでください。switchdb スクリプトを実行すると、一部のプロパティがデフォルトの非 XA 値で上書きされます。サーバを起動する前に、XA 情報が正しいか config.xml をチェックしてください。

XA を使用するサンプルを既存の RunSamples スクリプトで実行するには、次のようにします。

1. 既存の RunSamples スクリプト (非 XA 値) を実行します。
2. 44 ページの「手順 2 : Setenv スクリプトの編集」から手順 6 : fileRealm.properties の編集にある説明に従って変更を行います。

3. *SAMPLES_HOME*/integration/samples/lib/RunSamples.xml を次のように編集し、RunSamples スクリプトを実行したときに switchdb スクリプトが起動されないようにします。

```
<target name="SwitchDB"
    description="Switch database">
    <echo message="SKIPPING SWITCHDB!!!!!!"/>
</target>
```

4. RunSamples スクリプトを実行します。

XA 回復処理の設定

XA 回復処理が正常に機能するように、次の手順を実行します。

1. sysdba でログインし、以下の dba テーブルにパーミッションを付与します。

```
SQL> grant all on dba_2pc_pending to public;
SQL> grant all on dba_pending_transactions to public;
SQL> grant all on dba_2pc_neighbors to public;
```

2. dba_2pc_pend テーブルが空であることを確認します。トランザクションが存在する場合は、『Oracle システム管理ガイド』に従って削除します。

3. 各サーバの実行スレッド カウントを増やし、XA ドライバの最大 JDBC 接続プールの設定と同じ値にします。

4. Solaris の jDriver XA では、JVM クラッシュを避けるために、XA 接続プールに対して次のプロパティを使用し、すべての JDBC 接続プールに TestConnectionsOnReserve="true" TestTableName="dual" を追加します。次に例を示します。

```
<JDBCConnectionPool CapacityIncrement="2"
 DriverName="weblogic.jdbc.oci.Driver"
 InitialCapacity="8" LoginDelaySeconds="1" MaxCapacity="36"
 Name="jmsPool"
 Properties="user=scott;password=tiger"
 RefreshMinutes="0" ShrinkPeriodMinutes="15"
 ShrinkingEnabled="true"
 Targets="WLI_CLUSTER"
 TestConnectionsOnReserve="true"  TestTableName="dual"
 URL="jdbc:weblogic:oracle:(description=(address=(host=quadary)
 (protocol=tcp)(port=1521))(connect_data=sid=quadary9i)))"/>
```

```
<JDBCConnectionPool CapacityIncrement="2"
 DriverName="weblogic.jdbc.oci.xa.XADataSource"
 InitialCapacity="8" LoginDelaySeconds="1" MaxCapacity="36"
 Name="wliPool"
 Properties="oracleXATrace=false;user=scott;
 openString=Oracle_XA+Acc=P
 /scott/tiger+SesTm=43200+DB=quandary9i+Threads=true
 +Sqlnet=quandary9i+LogDir=.
 +DbgFl=0x0;password=stiger;dataSourceName=TXDataSource;
 ocixaDebugLevel=;server=quandary9i"
 RefreshMinutes="0" ShrinkPeriodMinutes="15"
 ShrinkingEnabled="true" Targets="WLI_CLUSTER"
 TestConnectionsOnReserve="true" TestTableName="dual"/>
```

5. Oracle Thin/XA Driver 9.2.0 を Oracle 9.2.0 のデータベースとトランザクションで使用して問題が発生した場合は、次の URL にある『WebLogic Server 7.0 リリース ノート』で「jDriver に関する確認済みの問題」の CR094209 を参照してください。

   http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/notes/issues.html